

***ほんしん** ほんしんの習ひ目の前の怒しみ難く(薩歌) あだとは知らぬ凡夫心、サア今宵こそ早歸つて明日の晝まで緩りと寝よう(生玉)

〔凡心〕凡夫心、即ち迷妄に掩はれて悟らぬ人心。大乗義章に「凡は調く生死凡庸の法夫は調く主夫凡法夫を成すが故に凡夫と曰ふ。」

***ほんそう** 茶の湯を上手になさるるゆゑ、人の用ひほんそうもある(鍵権三)

〔奔走〕走りまはり世話する義より轉じて、愛しつゝくしむこと。昨日波今日能物語(古活)に「今ほど世間に手かみがはやる、色々々まざままの古筆をあつめてほんそうする中にも、この衝殿の細しゆせきほどみごとなるはあるまいと沙汰する。」

ほんぞん かけたいで此笛にて時鳥のまねを吹き呼出し見んと横たへて、ほんぞんかけたとかすらせ吹きけし(天鼓)

〔ほんぞん〕かけたともいふ。その條を見よ。

ほんだはら 祝うて何處も吉野榊かちぐり、嘘でござらぬ本俵、春盤に土器、さすぞ盃ちよつと押へて(善門松)

〔本俵〕ほだはら(種俵)ともいひ、馬尾蓮の別稱で、正月蓬蒸餾などに用ふる。

***ほんち** 聖徳太子の御本地に靈山淨土、三界の教主世尊の御事なり(卯月紅葉)

〔本地佛が本有の妙理に契合せる眞實究竟の地位をいひ、垂迹に對する語〕

***ほんぢん** 江戸へ通しの馬追うて本陣に泊るが(丹波與作) 本陣宿の忙しき、數多の女出下僕(嶺山遊)

〔本陣〕在時大小名其他武家の公用旅舎を本陣と稱した。地方によつては現今もなほこの稱の残つてゐる旅館がある。本陣とは本營の義で、戰國時代行軍の詞の殘れるもの、貞治二年三月足利義隆上洛の時その旅舎を本陣と稱して宿札を掲げたるに始まる云ふ。

***ほんてん** 上は梵天帝釋、下は四大

の文官(天綱島)

〔梵天〕大梵天王をいふ。色界初禪の第一位の大梵天の君主で、佛教保護の神である。其形相は四面三目四臂を具し、帝釋天と共に佛像の左右に侍りてゐる。

***ほんな** 町人の分でない本細で縛つた、……、只の町人と違つて禁中の役をすれば、本細にかけ

ても大事ない(大經師)

〔本繩〕罪人を縛るに公の時にする本式の繩の掛け方をいふ。私の時にする略式な掛け方を假繩といふ。

ほんのくぼ 三百石から馬追まで成下るのくぼ、よい事ばない管と思はなんだば身の不覺(丹波與作)

〔盆蓮〕顔の後面の中央の窪んだ處。和訓栞に「缺盆の穴などよりいへる詞なるべし」と見えたる。往時人相見が盆の窪の形によつて其人の運不運を相したによつて、盆の窪を運命の窪といふ。

ほんほ 梵衆梵輔大梵天(天神記)

〔梵輔〕梵輔天の略。色界初禪の第二天で、大梵天の輔相である。

ほんぼりわた ぼんぼり綿もひねくろしく(安腹切) 妻は渡世の塗桶

に、丸綿ぼんぼり額綿(女夫逸)

綿帽子の一種。御所女中武家町家の婦女の被り物で、丸綿を薄く透した質朴なものである。思ふに「ぼんぼり」はぼんやり即ち臆縮の義で、丸綿の薄く透してあるよりの名であらう。遊遊笑覽に「ぼんぼり綿は丸綿の薄く透したるをいふにや。綿山井、うす雲はぼんぼり綿か月の面有。又後撰夷曲集、遠山のいただきには面白くぼんぼりと見九雲の綿かな水。天和笑雲集、上野花見の女を云内、御所女中は……ぼんぼり丸綿わけよくかぶり……と見えたる。

ぼんまうきやう 梵網經を和らげ、古今集十戒の和歌を引き(兼好)

〔梵網經〕維什三藏譯、梵網經蓮華佛說菩薩心地戒品の略稱。二卷より成り大乘律と四十八輕戒を説いてある。

ぼんらいつとく まづ初月は一氣胎中に孕まれ、其形恰も鶏卵の如し、これ本来一とくの精水、形に取つては混沌未分(體九)

〔本来〕徳本先天的に備はれる一の徳。體胎十月の由來を述べたる體九のこのあたりの文は、甲子祭天和四年刊、淨圓瑠、加賀孫正文の第五に見えてある文と大同小異である。

本来の面目 坐禪の床に本来の面目を悟る折柄(露散)

自己の本分などの意であつて、禪門法度の極度を示せる詞である。

***まいあひ** 異形は手を伸べ、檢非違使が二枚給

打つ(二枚給)

「まあひとよいふ、肩叩即ちみけんである。まいごみずな、まいごみずなを見よ。」

***まいす** さてきやつまいす坊主(井筒) 徳を飾りて名を求め、名聞まいすの嘘つき(兼好)

質僧の宋音。質の俗僧或は商賣して利得をはかる僧の義。僧を罵つていふ。

***まうご** なう死人に妾語は無きぞとよ(卯月調色) まうごかい(青灰申二世相)

〔妾語〕虚妄の言語。〔妾語〕とは虚偽の言語をなしてはならないとの戒で、佛法で五戒の一である。

***まうしゆん** (雪女)

〔雪女〕孟は始の義。春の始即ち正月をいふ。禮記・月令篇に「孟春之月、日在畢。」

まうぜい めぐりめぐりて輪廻を離れぬまうぜいの雑兵、切拂つた山姥が悴(弘敷殿)

猛婆に妾執をもちつたのである。妾執は煩惱に深く執つて捨てることのできないこと。

まうそう 雪の内に竹出で、金の釜を掘出せし孟宗郭巨に優つても(百合若)

〔孟宗〕支那二十四孝の一人である。呉の江夏の人。其母病臥して珍しい物を好み冬笥を求めた。宗雪中竹林に赴いて哀泣天に訴ふ。この時雪中に生じた。孟宗竹といふ名は之に因すといふ。

まうほ 正行は孫子が智、母が教は孟母が仁(女楠)

〔孟母〕孟母は始の義。春の始即ち正月をいふ。禮記・月令篇に「孟春之月、日在畢。」

藏より下されし御知行盗の米の罰、柵落にかからうぞと(稗考) 鼠取の柵落手に持つて(鷲門松)

〔柵落柵を歌て中に鼠を置いて鼠を誘ひ、鼠來つて其端を踏めば、柵忽に倒れて鼠を獲ひかざる詭譎〕

ますかがみ

人の悦ぶ日といへば我は歎きのます鏡(用明天皇) 千僧萬僧百萬僧のとひ吊ひにもます鏡、黄泉の曇が晴したやなう(卯月潤色)

ますすかけ

其やうな日出度い若衆に升かけを切米望み次第や(薩摩歌)

〔ますすかけ〕はますかき(斗格)の鞆。柵に穀類を盛つてこれを柵の縁なみに平すに用ゐる鞆である。ますすかけをきるとは、好運な人の切つた斗格の竹を用ゐれば福を得るといふ。蓋しこれ幸ひの意に取なしたものである。西鶴撰に日本永代巻卷一、二代目に破る扇の目の條に「其身一代に二千貫目とためて行年八十八歳、世の人あきかものつとてますかきを切らせける」と、同書卷六、智恵をはかる八十八の升孫の條に「爰に京の北山の里、かくれぬき三夫婦と人を誘ひ人あり、…この親八十八、其つれあひ八十一、男子五十七、その女房四十九、此子二十六、女は十八、一生少しのわづらひなく、殊更何れも挨拶よく、其身代も百姓の願ひの儘に田稻牛馬男女の召使ひ者様を並べ、作取り同前の世の中、萬の善心にまかせ神を祭り佛を信深く自ら其徳備はりて、八十八歳の年の始めに誰か書出して升蓋を切らせけるに、すなはなる竹の林も切り絶ゆるばかり、京都の諸商人はを察みけるに、商賈に仕合あつていよいよ

てはやして、三夫婦の升蓋とて俵物量るにこぼれ幸ひあり、上京の長者此升蓋にて白銀を振り分けて、三人の子に渡しけることとありと見えぬ。蓋し米蓋の質に斗格を切つて知人に分つ慣習によつたものである。薩摩歌のこの文は「ますかかけを切り」に「切米」をひかけたのである。

ますがた

ますがたの内よりこれ辨慶辨慶、塀の上より武藏坊武藏坊(源經) 大名小路の升形より、引馬に五つ道具・乗物の戸八文字に開かせ(會稽山)

〔升形〕城門二の門内の武者屯をいふ。武用辨慶(卷二)城郭に「升形。城門二の門内の武者屯を云也、軍法家に五八の短など云習ありとぞ、此門の裏に於て人数を量り出すを以て升形とも又武者屯とも云、城郭内の廣平の地なり、馬屯と云も亦同じ。是騎卒の屯する所なり。

ますほのすすき いとど思ひはますほの薄、殺しくされと抱き付く(感)

〔ますほ〕は眞鍮の義、赤く色づきたる薄。和訓栞に「ますほのすすき、眞鍮の義、赤く色づきたるをいふ成し」。この文は、思ひは増すをますほの薄にいひかけたまで、ある。

ますす さらもますすが、此日の玉ぐつと脱げ出で(二枚巻)

〔ますす〕は眞鍮の義、赤く色づきたる薄。和訓栞に「ますほのすすき、眞鍮の義、赤く色づきたるをいふ成し」。この文は、思ひは増すをますほの薄にいひかけたまで、ある。

ますせ 盗みかわくは何奴ぢやい、ヤアませの自然薯めか(丹波興作) 顔をませませませの小猿(孕常盤) ままた俄鬼めと拳三(四) 食はせ(關田川)

「まさるの鞆。増の義、年齢の程よりは大人。老成也。古今大帖卷四に、「山賊の垣ほにかこふませ垣、ませたりとし見えぬ君かか」「ませの自然薯」「ませの小猿の「ませ」は轉成名詞。

またい

律義またい半七に悪根性がつき(女脱切)

〔またい〕全の義。順正、從順などの意にいふ。この語現今も中國地方で用ゐてある。

またまた 井筒様殺すをまたまたと見ては居ぬ(井筒) かきたぐる程気が急ぐもの、まだまだ待つて居られうか(會稽山) 口でまだまだ申さんより、誓文の爲只今御前で金打たう(會稽山) いやまだだ(酒呑童子) 口でまだまだ申さんより、我がが心底見せやうはあるまいか(唐船歌)

〔またまた〕(問意問意の略。ぐづぐづ) (愚圖愚圖) べんべんだらり。但言集覽に「まだまだ」マダマダといふ。(後訓栞) マダマダ、埒明ぬ意、愚按、問タルキ也、マダマダといふべし。

またもの 秩父の郎等またもの本多づれ(會稽山) また者駕籠はいろは付け(丹波興作)

〔またもの〕秩父の郎等またもの本多づれ(會稽山) また者駕籠はいろは付け(丹波興作)

またじやうらふ 御祝言のまなびしたけれど、我我は男勝手知らず、待上臈も何もかも萬事そちを頼む(酒呑童子)

る。婚禮の時に新婦に付き添うて世話する侍女。

またぢやうらふ

姫君を御供申して御祝言、月代剃つたを幸ひにお興添へにも女ども、侍女郎にも女ども(聖女)

〔侍女郎〕「またぢやうらふ」の條を見よ。

またどしより 一家町年寄庄屋まで觸れ歩いて(淀鱈) 組中年寄月行事(女腹切)

〔町年寄〕略して年寄ともいひ、町内の公用雜事を掌る役である。町内の町人中で徳望あり資産ある舊家の者を公選して町年寄がこれを任命し、其任期は多くは三年、名譽職である。町年寄は何れも本業あれば、實際の町務は町代を置いて之に代らした。大阪舊時の町年寄は毎町一人で、小町は隣町の年寄が兼務したのである。町年寄はその町の會議をなし、又毎月判形と云う町内に住居せる者に戸籍帳に捺印せしめる時などに出席する家を毎町に設け、これを町會所又は會所と稱した。

またつ 梅葉しく松高き、位ばよしや引締めて、哀れ深きは見世女郎(冥途飛脚) 抱の松あり客も待つ(鷲門松) 當所教習の町に名高き松の御座候(辰魂香) 情の縁はびこりて、松の位とたとへられしにもくからず(生玉)

〔松〕太夫をいひ、遊女の最上位の者である。太夫を松といふことは、泰始皇帝が雨を松樹下に避け、其陰を封じて五大夫となしたといふ故事に據つたのである。謡曲「老松」に通じて松を太夫といふことは、泰の始皇の御狩の時天候に小松大雨額に降り給ふ、この松をたしのがんとか松の陰に寄り給ふ、松の間に大木となり枝を垂れ流るならん、木の間に

〔松〕太夫をいひ、遊女の最上位の者である。太夫を松といふことは、泰始皇帝が雨を松樹下に避け、其陰を封じて五大夫となしたといふ故事に據つたのである。謡曲「老松」に通じて松を太夫といふことは、泰の始皇の御狩の時天候に小松大雨額に降り給ふ、この松をたしのがんとか松の陰に寄り給ふ、松の間に大木となり枝を垂れ流るならん、木の間に

きまを鑿きて其雨を漏さざりしかば帝・太夫といふ爵を贈り給ひしより松を太夫と申すなりと見えてある。松を太夫といふよりして遊女の位なる太夫を、松とも松の位ともいふたのである。『太夫』を見よ。

まつかひさま 「まつかへさま」を見よ。

まつかう 羅生門にて我が兜のまつかうこそ引いたれとしやくつて引けば(酒香童子) 己れらまでも同じやうに立騒いで何としなる、まつかうすると掴み附くを取つて投げ(女殺)

まつつか 錦文流櫻傾城八花形に昔まつつかさる人の書き傳へたる物語。傾城酒香童子のこの文は、先斯に眞向をいひかけたのである。

まつかぜ お行水なされておつつけ松風、皆待かれてござります(反魂香) 能見る心もあら磯の、松風もはや過ぎにける(吉岡染)

まつか 能見る心もあら磯の、松風もはや過ぎにける(吉岡染) 松風、諸曲の名。在屋行平が須藤・龍藏した松風・村雨といふ姉妹の海人があつた其執心の幽霊出でて昔語をなし、僧の回向を望むことを作つてある。この謡曲は俗に熊野松風米の飯というて、熊野と共に人々の好む謡曲である。

まつかは 釘貫・松皮・黄紫紺(五人兄弟) 私か紋の松皮の、松の千歳を祈りしに(冥途飛脚) 誰白河は大身の鎗駕籠の紋は松皮菱(薩摩歌)

〔松皮松皮菱の紋。奥州白河城主・松平大和守基矩〕



の狸籠の紋は左衛門光成以下を語らひ合戦の用意事急に候、かたがた御油斷あるべからずとまつかへ様にぞ讒しける(最明寺殿) 某先へ駈抜けてまつかへさまに言上し、曾我の根を絶やさんと(倉橋出)

まつかへさま 安藤

まつつや 柏屋の長がもとへと案内させ、座敷に通ればまつつやども、前後左右に居ながれて(吉野忠信) 長う入らぬは見せかけ大盡、物吸物(童女)

まつつや 柏屋の長がもとへと案内させ、座敷に通ればまつつやども、前後左右に居ながれて(吉野忠信) 長う入らぬは見せかけ大盡、物吸物(童女)

まつたけ 嘉平次はさがなはなれし嵯峨松茸、より残されし風情にて(生玉)

まつたけ 嘉平次はさがなはなれし嵯峨松茸、より残されし風情にて(生玉)

まつばたばこ 煙草と待つ宵の、松葉たばこの柔らき、女中仲間ぞ賑はしき(姫山遊)

〔松葉煙草〕野城相馬郡松川から産出する煙草をいひ、品階第三等(中の下)のものなること、煙草飲の煙草の種類を擧げた中に見えてある。

まつばやし 永享三年正月三日將軍家の御松離北山の御所にてある(雪女)

〔松離〕松離は足利時代の何時はまつたか明でないが、應永二年正月二日足利將軍義隆が管中で松離あり、詭初めを行ふ。それ以來幕府の詭初は正月二日、初めてあつたが、重應三年から正月三日の時もあつた。民間では正月四日に行つたものが多い。大友興廢記・大友家年中儀式の條に「元日より三日まで府中の町より松離する、松離とは肩はきたる兒あまた装束を著し、裾波にて踊る、笛・鼓・太鼓に拍子あり」と見えてある。

まつる 頰冠して目を隠し、杓見地悪いと根性、諸人の憎み猜むまで引まつてあやかり給へ(孕常盤) 全集める義に、軍場などに人をまつめるなどいへり。

まつぼんごぢよく さりながらとても此世は假の宿、末法五濁の世の中、釋迦彌勒廣大慈悲の父母、もな(心五戒魂)

まつやま 迷ひ行けども松山に似たる人なき浮世ぞと天網鳥

者ども久兵衛を監禁した。爲に久兵衛泰壽の果、遂に狂狂して家を出奔した。もた狂亂して川中に松山が如く見えて飛込み溺死したといひ、實談詳でない。迷ひ行けども松山に云々見よ。

まつつひ 頃しも仲秋十四日まつつひの月更けて(天智天皇)

〔待宵陰曆十四日の夜の稱。蓋し十五夜の月を待つ宵の義である。序云、十五夜を望月、十六夜をいざよひ、十七夜を立待、十八夜を居待、十九夜を臥待とも譯せといふ。曾根崎心中に「鳥の時ぞと除所待つ宵きまきぬも」とある。待つ宵は、戀人待つ宵の意。まつらぶね 逢瀬は(い)とまつら舟、こがれこがれて(根元實枝)

〔松浦舟〕筑紫松浦の地、萬葉集・卷十二に松浦舟さわや堀江のみを早み、楳取の間なくおもほゆるかも。この文は、「いつと待つ」に「松浦舟」をいひかけたのである。

まつりのねりしゆ 「ねりしゆ」を見よ。

まつわか 「あそぶのまつわか」を見よ。

〔松山〕延寶頭大阪新町の遊女である。大阪御堂前の豪商榎屋久右衛門の息子久兵衛・松山に關染み、巨額の金を浪費したので、親族の

條に「あつても〜私(わたくし)が事をきかしやんすほどに、今日はなんの日ぢやまで、をかしは〜」

まてはしひ 柑
 子・金柑・馬手
 馬椎(饅頭天皇)
 「馬手・馬椎」常緑喬木で高さ二三丈に達し、種子は食用となる。「持ちたる木の實云々」を見よ。



〔ひしはてま〕

まどし まじやうに紡み合はせ組み合はせ接ぐまどしさま、女仕事の手抄りて(唐船斬)

まどぶ あれあれ笛がやんだわ、まどうて返しや笛返しや(孕常盤)

まど 物を借りて損じたるを元のやうになはして返すをいふ。賠償する。この語現今も中國地方で用ひてゐる。和訓栞に「俗に盆籠諸物に就て、借つて損したるを本の如くするをまどぶ」といふも、迷はしたる物を還すよりの詞なるべし。賠償の意なり。

まとや 的矢は業の矢とて親の敵を射る故實あれども、鹿を射る法はなし(會稽山)

まなひ 的矢的を射る稽古矢であつて、矢射は黒漆で薄く塗り、三節あつて管を節で作り、切羽の眞鳥羽で短やのが普通なる由、高思聞書に見えてゐる。

まなひた 種まなひたのまなひた木にしつかと括る(天網島)

まなひ 種小屋にこの名稱あるものを心得ず。よつて按じると「まなひた」は「まなげ板」の略で、「まなげ」は新・目新まなげをすることをいふ古語であらう。

まなび 種小屋の前面上部に亘せる新目新の横木を云うたもので、其中央には小さな木車があつて索を懸け、その索によつて水門の戸を開閉するやうにしてある。

まなご まなご交りの砂利土に四足みかつづと踏入込んで(虎が磨)

まなび 和訓栞に「まなごをまなごともいへり、眞砂子の糞なり、和名抄に細砂をよめり。」

まなばし ぶえんの鯨・まなばしいらすの手料理(三國志)

まなぶ 魚鱗を料理するに用ひる箸。和漢三才圖會に「魚鱗以鐵作之長六寸柄四寸許。」

まなび 笠を枝葉の笠となし、こゝにてまなび見申さん(反魂香) 病死と偽り葬禮をまなび此姿は何事ぞ(賀古教信) 今宵君の御慰めに女中一人参らるゝも、御祝言のまなびしたけれど(反魂香)

まなび 「まなぶ」(眞似)の轉。眞似る。

まねぎ 衣の下の薄米一尺二寸抜討に、はつと飛退く梶原が烏帽子のまねぎを切落され(會稽山)

まねぎ 烏帽子の前面、ひなさまより上にあつて前方に出でゐる所の名。横さびの烏帽子は、昔は柔らかな烏帽子で、それを折つて三角のまねぎを作つたもので、まねぎは即ちひれである。

まのちやうしや まの長者同前の大金造に思はれて(二枚輪)

まの 鹿野長吉用明天皇職人鑑に見える人物である。人名部を見よ。

まは 銀管の眞羽の矢負ひ(松風)

まは 弓は重藤・山鳥の眞羽の箭矢(権符)

まは 「眞羽」貞丈雜記「矢之部に、「矢の羽に眞羽」といふは鶯の羽のことなり」と見えてゐる。

まはし 「山鳥の眞羽」とは、山鳥の尾羽の斑文が鶯の羽に似たればいふ。

まはし ヤアなんぢや廻し者、オオ男ぢやも廻しをせいでよいものか(歌念佛)

まはす 佐治右衛門は前に懸縁の疑邊行爲を男女の喧嘩と合點し、今また廻し者(問者)を、其趣を弄する者と解した處に律儀一片の田舎爺、其趣やはたむべきである。宜なるかな悪漢の奸計に陥ること。

まはす 男の意地ならば手柄に吾妻を廻して見や(露門松)

まはす 廻山山雲山撰色道大鏡に「まはす。男の氣にちがはびと女の方より從ふ貌なり、たとへば風車の風にまふてくること廻るやうに男の心に隨ふなるべし。巢林子作、曾我會稽山に「かほどに思ふ福經に廻りやうがさうでなし」とある。「廻り」もめてなしぶりの意である。

まはだ まはだ・力革・金の覆輪ふつと切れ(加増曾我)

まはだ 「馬鹿」馬の背骨に敷くもの。武家名目抄「與馬部に、可張記云、敵計持て出る事、是も切付馬鹿ある時は、左の手を兩の馬はだの間へしつ輪の方より入て、右の手にては右の方の馬はだ切付へかけて持て出るなり。」

まはる 「まはす」の條を見よ。

まはる 思へば天一天上の五衰八專まびもなし(大經師)

まはる 「間日」八專間日を見よ。大經冠に「庚申甲子一夜の間日もあることか」とある。「間日」は間引日の意に用ひたのである。「からしん」きのえぬを見よ。

まひごみずな 葉屑泥土まひごみ砂互に投かけ攪かけ(女奴)

まひごこなひ 初生の茄子の蒂のまひごこなひと見たれば餅目か(私歌)

まひごこなひ 「舞指茄子瓜などか晴形となつて發育不充分に終ること。できごこなひ。茄子・瓜などが發育不充分に終り、又は畑の野菜類の枯れるを舞ふといふ。

まひびる 舞鶴は飯原左衛門(五人兄弟) 朝比奈の三郎が定紋舞鶴、同じ様に候は飯原が手柄薄くなるかに候(扇八景) 朝比奈が舞鶴はぎやつと生れし産衣より附き來たる定紋(扇八景)

まひびる 「舞鶴」紋所の名。夜討曾我(舞交本)に「舞たるつるははは左衛門」とあつて、次の紋繪が載せてある。また朝比奈三郎義秀の定紋は、九めた舞鶴の紋を附けてゐるが古畫に載つてゐる。

まひまひ 暮に立つたる歌比丘尼。舞ひ舞ひ。物質似さまさまの賑ふ中に(賀古教信)

まひまひ 「舞舞」鳥帽子直垂・大口を着て、幸若・大頭(舞)の條を見よ。この舞を扇拍子で舞うて、施物を乞ふ一種の物質。西鶴撰、胸算用巻一、長刀はむかしし籍の條に「その東隣には舞舞住みけるが、元日より大黒舞に商賣をかへれば、五文の面、張賣の舞一つにて正月中は口過ぎすれば、この鳥帽子直垂・大口はいらぬ物として、二匁七分の質に賣きてゆるりと年を越しける」。



〔鶴舞〕

***まぶ** まぶで逢うたも一昔(女腹切)げにまこと中戸小宿で、ちよつきりちよつきと間夫をきらるる(女夫池)曾我の十郎祐成様と姉女郎の虎様とのまぶのなかだちしげしげの虎が應 まぶこそ汐の満干なれ(反魂香)

「間夫情夫。馴染の間柄。色道大崎名目に「表向の買手にあらずして密通する男をいふ。眞實に思ふ夫といふ事也。建國女池に「間夫を切らる」とあるは、横を切られる意即ち遊女が揚げられてある客を外して、間夫と密通するをいふ。面白花の郎云々」をも見よ。傾城反魂香のこの文は、情夫に逢ふことまじきひきがある意。

まぶ 炙して山の腰暖めや、久久まぶが跡切れたにちと山入致さうか(抱狩)

「間狩」城をいふ。「まぶ」の語古くは細川幽齋の九州道の記四月二十九日(天正十五年)の條に「まぶよりほる白銀」とあれば、まぶは金山言葉であらう。松永貞徳撰あぶらかすに「人の情や穴に有らん」の題にて「がな山のまぶと申かほれ心」と見えてゐる。諸分店風松之部一、納戸の條に、「まぶといふことは金山の堀口をまぶといひます。菓林子のこの文は、横を女陰にきかせたのである。

***まぶし** 星月夜の紅葉の蔭、まぶしきさせて山山の、狩人集め狩りけれども、白き鹿こそなかりけれ(五人兄弟)

「射騎」目撃の義であらう。獵夫が鳥獸を射るとき、柴などを折かけて身を隠すの。箋注和名類聚抄に「射騎。之。末布所。以。隱。射。者。也。」

按論文、鬚蓋也、所謂鬚蓋即是、故其字从レ羽、轉爲凡隱蔽之稱。

***まぶる** 女房一人まぶつてゐる男とては無けれども大經師 わしが顔阿呆らしう見えたやら、まぶられて歸りしぞや(重井筒)

「まぶる(守)をまぶはしといひ、轉じて「まぶる」といふ。見守る。

***まぶる** おのれが母に流れの者、空言に身はまぶれても心のたまかさ(うたうさ(歌念佛))

「まぶる(塗)の轉。泥などにけがされて塗つた如くなるをいふ。汚れに染まる。泥まぶれ」「血まぶれ」などいふ。「まぶれ」もこの語である。

前三後七 土用八專構ひなし、前三後七慎しみなし、炙した夜でも戀衣(抱狩)

灸點の前三日間及び後七日間。この文意は、灸點の前三日間と後七日間は房事を忌むのであるが、伊吹文の功能はその構ひなしといふこと。

まへだれ 前垂・鍵は下げまいと親御の事まで思はれて(反魂香)

「前垂」遊手は赤前垂で巾着の鍵を下げてゐたによつて、遊手の身の上を云うたものである。「やり」を見よ。

***まへびろ** 前びろに手形しよう爲に呼びやつたと語りける(女腹切)只今にも野心を讎し御兄弟御和睦、公時が願この上なし、さるによつて鶴を待たずまへびろに参上致す(開八州)

「前廣」前びろ。前びろ。但言集覽に「前びろ」頭義文に豫先」と云。

まへほる 大の男の前ほる掴み、目より高く、ぐつと差上げ(井筒)

「前母衣」鬚蓋の前。曾我物語卷一、奥野角船の條に「右の腕をつつと延べ、俣野が前ほろを掴んでさしつけ、荒くも働かば手綱(ふんどし)も腰も切れぬし」。

***ままし** 母上様がままして萬つ間くあたりに給へば(三世相)

「まめいた」これは上物上目利と豆板一粒はつとばつみ(重井筒)これぞ飲んで下されと、二三奴の豆板二つ(大經師)

「豆板」豆板銀、銀玉、粒銀、豆銀、小玉銀などといふ。豆とは圓くて豆の形に似たるよりの稱、江戸時代に行はれた銀貨の一種で印があり、大小輕重異り、景目によつて通用した。菓林子時代までの豆板は、慶長豆板銀(慶長六年鑄造)銀六分、重さ三錢五分、元祿豆板銀(元祿六年鑄造)銀八分、重さ三分、寛文豆板銀(寛文三年鑄造)銀五分、重さ五分、重さ二錢八分、その他寶字豆板銀(寶永三年鑄造)、三寶豆板銀(寶永七年鑄造)、四寶豆板銀(正徳元年鑄造)、享保豆板銀(正徳四年鑄造)があった。

まめをとこ 在原の中將なりけるまめ男、戀ゆる旅を信濃路や(川中島)お國の御用あら玉の、こに年とる豆男、阿波の國平岡左近と宿札も門の飾にときめて(夕鬱)

忠實な男。心のあだだしからぬ男「まめ」は實の義。忠實または信實などの字を訓んである。伊勢物語二段に「それをかのまめ男

うち物語らひて」女重寶記一五、新やまと言葉の部に「まめ男とはしんじつなる男なり。」

***まもの** 難波・瀬尾が無分別、巻軸の取らんと舞いたり、ハアア子供遊の綱引か、悪あがきする俄鬼めらこれ見よと片足あげ、やあうんと氣をこんでまのをふつつと階切れば(安藤島) 大釜の形に重さは磐石、まもの綱に絡め付け(唐船遊)

「眞物」藤絲を縛へる綱。若綱。和漢三才圖會卷二十四、百工具、細の條に細以若綱之、俗曰眞物」よつてこの條を見よ。

まゆねかく 柳を見よ。

まらうとさね 今日ば飯原左衛門經景・紋廣めの祝儀振舞、工藤祐經をまらうとさね、相客は昵近の旗本三十餘人(扇八景)

「まらうとは「まれば」と(稀人の)番使。常に家に居ぬ人の義で、賓客をいふ。ざねは「君ざね」神ざねなどいふ。ざねで、其者を賣ぶ意に添へていふ。後尾語である。和訓栞に「まらうと。賓客をいふ、希人の義なり。まらうとさね伊勢物語に見ゆ、上客をいふ也。」

まりかかり 足を早むる毬かかりの蔭(女夫池) 局の御簾を打抜いて毬かかりまで投付けられて、砂まぶれになる程に(天鼓)

「毬懸」蹴鞠の庭「かかり」を見よ。

まりがきのおほあみ 鞠垣の大綱をそろりそろりと引延し(雪女)

「鞠垣大綱物」の脱出を防ぐ爲に毬懸りの周圍を取巻く大綱。

***まを** 御留守の間お種様眞芋をお

續みなさるると、道中すがら家中の沙汰(堀川被敷) 圓い芋桶に角の蓋(眞芋)のみためて縋ひ交せて、今は我が身の縛り繩(大經師) 我は涙の芋持練る、眞芋をくるとや世の噂、手で握きかぬる川水に(籠籠三)

眞芋に(密男)を通して、茲通の隠語である。眞芋を縋む「眞芋を縋る」などいふは茲通する意の隠語である。籠籠三重帷子の文は「眞芋を縋る」に「眞芋縋る」をいひかけたので、眞芋を贈物にするは茲通を知らず風刺である。

間を渡す 此子に着せてまを渡したも、私が智恵ではあるまい(重井荷) 急場を取繕う一時凌ぎをする間に合はす。

***まん** なんぼ浪人でも際(さい)の日の賣、まんが直ると差出せば(女殿) 此年越からまんが直つた(雪女)

「ま(間)に撥音(ん)の増加した語である。謂子。運。現今も中國地方で「運の好いを」「まんが好し」といふ運の惡しを「まんがわる」といふ。「何とまが悪いでせう」といふ「ま」の間で、即ち運の惡である。

***まんがち** お主下人の別ちも無く、其方よ此方よとまんがちに路次に駈出で走り入り(天鼓) 出抜いてまんがちに乗出すな(日本武尊) エエ

「まがち(目勝)に撥音(ん)の増加した語。我勝も自分勝手。目勝は神代紀下に「遣(從)神」往問時、有八十萬神、皆不得(目勝)相問、故特勅天鈿女曰、汝是目勝於人者、宜(往)問

之)と見えて、人に對して怖れない、憚らないの意。轉じて我勝も。自分勝手に意にいふ。

***まんこ** まんこが其日の装束には阿菊菩提の腹巻に(女護鳥) 二人はあきれて言葉もなく、まんこが玉を取られし心地(弘敷殿) この爪音の優しやと覗き給へば、座敷にも聞き失ひて茫然と、まんこが玉の玉琴の調子まばらに狂ひけり(孕常盤)

「萬戸(萬戸將軍)をいふ。萬戸が玉」とは萬戸將軍が唐太宗の勅使となつて持來つた面不背の玉をいふ。面不背の玉(玉)及び假作人名部(うんそ)を見よ。萬戸のことは舞之本(大經師)の中にも見えてゐる。

***まんこ** 萬劫經るともよも盡きじ(百日曾扶)

「萬劫(永遠)の意。劫は「こふ」を見よ。

***まんざい** たつた今毎年京へ來る得意のまんざいが來て不思議立つたを(天經師) こゝな萬歳傾城 萬歳ならは春おち(や)分霧

「萬歳(鳥帽子)を著、年の始に門門に來つて祝詞を唄つて舞ふもので、足利の器中には正月七日に來たので、萬歳は蓋し男箱歌の餘風であらう。古くは千秋萬歳と稱した。それは萬歳唄の中に千秋萬歳の詞のあるを取つて名づけたのである。萬歳唄は一定してはゐないけれども、概して「徳若に細萬歳、當細殿榮えませす、ありけうあり新玉の、年立ちかへるあしたより、水も若や木も芽もささかえけるは、誠に日出度う待ひける云云」といふ唄である。日次紀事(延寶年中成)正月五日の條に「凡千萬歳(出自)種田(筆尾)村、此兩村に南都西南相去三里許、此内兩流別種田(筆尾)是也、種田木夫(筆尾)木夫是

惟左部右衛門而稱之、各學(徳庭)而舞。人稱訓讀師(龜)元祿三年刊)七に「萬歳樂。年の初めでたきためしをいはば萬歳樂とは聞えたる事なり、此流諸國にあり、京に出るは大和より出る、中國へは美濃より出る、東は三河より出るなり。」萬歳傾城というわけは、萬歳唄の句「誠にめでたう候ひける」(侍隨)の意にきかされたからである。なほ夕霧阿波鳴渡のこの文に「誠に日出度う侍隨る……徳若に細萬歳や、年立ちかへる足駄にて、誠に目出度う侍隨る」とあるは、萬歳唄をもつたのである。果林子はその作中、天鼓、松風村雨帶巻、大經師首飾、平家女護鳥などの中にも萬歳唄を用いてゐる。「たたくの條の書を見よ」。果林子作「生玉心中」の巻に「萬歳が見もきやうある間の山、花は散りても根に返る、人は歸らぬ死出の山」とあるは、萬歳が間の山の唄を詠ふのだから、相も興あるといひ、それに萬歳唄の語のありきやうをきかせたものであり、なほ間の山と頭語を踏ましたのである。

***まんざいらく** (薩摩歌(蛙合歌))

「萬歳樂平調樂。千秋樂は民云云を見よ。

まんじゆしやげ 摩訶曼茶羅華、曼殊沙華、句はば句へ咲かば咲(露迦)

「曼殊沙華(梵語)Manjusaka 赤蓮華をいふ。翻譯名義集に「曼殊沙此云柔歌、又云赤蓮」。年寄つても女の留守、寝ても夜の日をまんじりとも明六つ五つ四つになれば(蛙合歌) 心たまじりや夜よとなつて、身だまんじりともせない(博多)

「まじりに撥音(ん)の増加した語で、「わざん」をわんざん」といひ「みな」をみんななどといふ類である。まじるきつ見るこ。

「まじり」に撥音(ん)の増加した語で、「わざん」をわんざん」といひ「みな」をみんななどといふ類である。まじるきつ見るこ。

まんぢら 三輩九品蓮の絲の其曼茶羅(は)さもあら(黄古教僧) 初七日には曼茶羅供(佛九)

「曼茶羅(梵語) Mandala 輪回具足と譯し、淨土寶相の圖をいふ。大日經疏(第四)に「曼茶羅は輪回之義」蓮の絲と其曼茶羅とは中將姫の故事である。ちゆうじやうひめ」を見よ。曼茶羅供は曼茶羅供養をいふ。

まんぢらげ 例へば優曇華・曼茶羅華・七重寶珠の花とて(五人兄弟) 曼茶羅華(梵語) Mandarava 白蓮華をいふ。まかまかだげに見よ。

***まんぢゆう** あの後からわつと出たまんぢゆうの木は何とやらいひますの、ハテこゝな人、木の名は檜葉(聖徳太子) 落雁(かすてら) 羊羹より、菓子盆運ぶ腰元の、饅頭肌で懐か(さ)反魂香

「饅頭(字)の元代の音か。蘇州府志土產門上に「饅頭」古建仁寺第二世臨山禪師入宋、于時中華製(造)饅頭元順宗至正元年臨山師入朝、日、林靜因相從來、在本朝(改)氏體(體)始住(南都)製之、其形狀片圓、是稱(茶)良饅頭是本朝饅頭之始也……外皮實(稱)白(内)杏重甘美、凡饅頭並餅、納(砂)砂並亦小豆粉於其内、蒸而食之」。

「饅頭の木」とは檜葉をいひ、饅頭の下に敷くまじりの輪。繪本玉かづら(西川祐信書)下巻第七枚目裏面の繪に、落菓子の下に敷ける枝葉は檜葉のやうである。

「饅頭肌」とは饅頭のやうに脹らんで白く柔らかな肌をいふ。

「反魂香」とは饅頭のやうに脹らんで白く柔らかな肌をいふ。

「反魂香」とは饅頭のやうに脹らんで白く柔らかな肌をいふ。

「反魂香」とは饅頭のやうに脹らんで白く柔らかな肌をいふ。

まんどころ (最明寺蔵)

「政所鎌倉時代職制の一で、幕府の政務を總攝し、御家人の成敗財政に至るまで皆これを總べる政所である。始はこれを公文所と稱したもので、長官を別當といひ、其他執事・書人などがあつた。

まんねんぐさ このお山の萬年草は人の命の生死を示し給ふと申すゆゑ(萬年草)



「きぐんねんま」

まんねんごよみ 萬年曆・昔曆・新曆(天經師)
「萬年曆」一年限りでない曆で、人の運勢や方角の吉凶などをみる天雜書・三世明驗の類をいふ。日本元代藏(卷五)に「萬年曆のあふも不思議あはぬを充かしたま也」。

まんびやうゑん 早く寝せて疾く起し、晝あがかせたが萬病(寶鑑三)

まんま 引解(引)きし鍵取出し、まんまと明けて鍵は元の紙入に初の如く納め置き(二枚繪)

「うらま」(冒言)の約説。首尾能く。(小兒語に飯などゑまんまといふも、うらまの約説である。

まんろく 彌陀の六字の名號をママママンマンまんろくにトトロト唱へて死にたい(川中島) まんろくをいふ時は皆與兵衛めが悪いぞや(卯月紅葉)

「まろく」(圓また眞正)に撥音「ん」の増加した語。公平。完全。十分。現今も鳥取市地方の言葉に、十分または完全の意に「まんろく」といふ。耳與律に「擾まんろくと思はば見物忘れ、狂言を眞のやうまんろくに致したるがよし」と和訓栞に「眞をまん」とよぶも多し、まん中・まん圓・まんろくの類也。

み

*みあがり 今日ば小女郎様の母御の十三年忌追善の爲身あがりして(三世相) 一生身あがり仕暮しても、そなたのやうな意地腐に小判の積杆でも動く女郎ぢやないぞや(齋門松)

「身擧」我が身で我が身を擧げる(擧げるは、遊女を呼ぶ意) 遊女が勤を休むことをいふ。身擧りすればその日の擧錢を見積つて抱主への借金の中に加算されるのである。人倫訓蒙圖卷七に、「傾城のつらひにて勤の内」に身あがりすれば、その擧錢額方への借金とつり、

年季あきて此かねを立てねばだきぬなり。野傾友三味線(寶永五年刊)卷之五、堀江屋の枝川といふ遊女の詞に、「我身を我と買ひたる身あがり代云云」傾城鏡箱氣(寶永八年刊)二に「身あがり」とやら云うて、錢體を借金出しに買はるるやうなむさひ意氣は云云。

*みあれ 正八幡大菩薩築紫にみあれの折柄も石上樹下の吉例あり(安夫池) みあれの注に引く鈴の、叶はずばよも鳴らじとの、頼みを賀茂の瑞垣に、玉依姫のその昔、別雷の御神を、御産の紐のやすらかに(安夫池)

「御生」または「御形」よんである。河海抄に、「賀茂祭前日於垂迹石上有神事號し御形」。花鳥餘情に「みあれは玉依姫の別置を生み給ひし所をいふにや、さて御生とも書けり。即ちかたちをあらはし給へる故に御形とも書けり。

*みうけ 餘所へ預けて置いた金、身請の爲に取戻した(冥途飛脚) 身請の衆は親方が済んでから、宿老殿で判を消し、月行事から札取れば大門が出来るまで(冥途飛脚)

「身請」遊女などの身の代金を拂うて其の商賣から返かすこと。請出。落籍。身請門出には遊女の身の代金を拂うて、親方が済んでから宿老で判を消し、月行事から札を取つて、自由の身となつて大門を出るのである。そして其際は相應の内祝も行ったものである。異林子の作中、身請門出を書いたものに、その派手なのは淀鹿出世浦徳上巻に淀屋勝二郎が太夫吾妻を請出す條、齋門松・下巻に難與平が太夫吾妻を請出す條、博多小女郎波枕・上巻に毛刺九右衛門が數多の遊女を請出す條などがあり、またその哀れなのは冥途の飛脚、中巻

に忠兵衛が梅川を請出す條などがある。これらで略推察できるが、なほ異林子よりの後の撰述の湯屋寶曆七年刊)に「身請門出」身請定まり門出の日、湯屋茶屋裏方の親類知習の路々へ梅若、或は絹織物等相控(祝儀となす、又もらひたる方より)もそれそれの扇事は、其後門出名残として家内一門一家書集り、料理に結構を盡し、盃事ありて揚屋より迎へ来る、乗物持たせ来るもあり、かるきは竹筒被首笠さざまざり、夫より揚屋にて又盃事あり、此時なじみの女郎達思ひき番集り、見送の事どもあり、門まで賑々しく見送り、はなやかなりし事もいふ事なし、この儀式は大森考とならる。威勢次第にて華美かぎりなし」とあるも考とならる。

みえいだらう 地名部「みえいだらう」を見よ。見えいろ 「いろ」を見よ。

*みかうし 舞樂があるからばまだみかうしてはなない、内へはどれから入る(ことぞ(聖徳太子) 主殿司の宿直守御格子参る(酒吞童子)

「御格子」御格子参る。御格子参る。御格子は細く木を削つて、基礎の目の如く組んで黒く塗り、裏に板を張つて上下にあげおろすやうにしたものである。伊勢貞丈は、格子は板なり、華は板を張つてあるやうに云へども、松岡行義の後松日記に其誤れるを察してある。御格子参るは御格子を下すをいふ。

みがち 時景もとより身がち者、北の方にさしこまれ(天鼓)

「身勝身勝手。利己心強きこと。

みかものはもの これへ見えた飛脚の足本のねばいば三河者に極つたぞ(舟波與作)

「あしものとねばいば見よ。